

# 軍事史学

第52巻 第3号

## 巻頭言

### 劣化する史蹟

川島 正

熊本地震による熊本城の被災はまさに目を覆うばかりであった。私はたまたま熊本城横の県立美術館で開催中の美術展に関与していたので、前震、本震による熊本城の崩壊状況をつぶさに目にした。前震による被災は驚きであったが、本震による被害の拡大を目のあたりにした時は悲しみが込み上げてきた。熊本城は熊本城のシンボルである。過去幾多の災害や火災にあったが、県民、市民の熱い思いを支えに復興、再建されてきた。

単なるシンボルではない。西南戦争の銃砲火に耐え抜いた日本近代史の嚆矢を飾るシンボルでもある。

西南戦争からすでに一三九年を経た。薩摩軍の五〇日にわたる包囲と猛攻に耐え抜いた熊本城でさえ大地震の前には崩壊する。国特別史蹟の熊本城であるから、膨大な時間と資金を注ぎ込んで復興再建が図られている。だが、市井の片隅で経年変化で老朽化し、自然災害で損傷したまま行政や市民の目に止まることもなく消え去り、忘れ去られようとしている史蹟もある。

官軍墓地もその一つである。砂岩で成形された墓石は、一四〇年近くを経てひび割れや剝落、断裂したものが目立つようになつた。墓石に刻まれた文字も読み難いものが多い。新しい墓石に建て替えたり、ひび割れを針金で補強したりしており、関係者の苦心と苦勞が偲ばれる。周辺住民の志と奉仕で清掃は行き届いているものの、墓石の劣化は防ぎようがない。

ある官軍墓地は、劣化した墓石をすべて取り払って台祀塔とし、空き地となつた跡地を公園化した。そういう管理の仕方もあるであろう。だが驚くべきは空き地となつた跡地(国有地)を時の政府は競売に掛けたのである。国家に命を捧げた将兵を尊び、悼む気持ちよりも財政の糧にすることを優先したのである。幸い心ある人たちの運動もあって、落札者は権利を返上し、地元の方が管理するところとなつたが、劣化する墓地をいかに管理するかということは、二十数カ所ある官軍墓地それぞれが抱える共通の問題である。

官軍墓地に限らない。また西南戦争関係だけでも限らない。数多い史蹟や遺構が年月とともに姿を消すことになれば、それにまつわる史実も忘れ去られていくことになる。埋もれかけた史蹟や資料・文献を掘り起こし、整理して、国民の意識を啓発・覚醒するのも軍事史学会の役割ではあるまいか。